

中国残留孤児の認定が受けられていない中国・黒竜江省方正県に住む徐士蘭さん(推定69歳)が、初の「一時帰国」を果たした。昨年度、日中両政府が確認した残留孤児は調査開始の81年以來、初めてゼロになったが徐さんと同様、物的証拠や証言者が乏しく、認定されない人は相当数に上るとみられる。支援団体によると、未認定の「残留孤児」が自主的に帰国するのは珍しいという。
【竹内良和】

「自分は何者証明を」

未認定 祖国の土踏み楽に 一時帰国

一時帰国は09年に公開されたドキュメンタリー映画「嗚呼、満蒙開拓団」(羽田澄子監督)の出演をきっかけに、市民グループ「方正友好交流の会」(千代田区)のメンバーらでつくる有志が企画した。渡航・滞在費は親族や有志のカンパ、募金で工面。8日、徐さんは新潟に三女と2人で到着し、東京に向かう新幹線ではずっと窓からの景色を眺めていたという。交流の会などによると、徐さんは1945年8月下旬、ハルビン市郊外にある方正県の警察署に隣接した小学校で養母の親戚、張文学さんに引

中国・黒竜江省 徐士蘭さん

き取られた。小学校には敗戦の混乱で日本人が集まっていた。張さんは駆け寄ってきた背の低い丸顔の女性に片言の中国語で「助けて」と泣かれ、徐さんを引き取った。女性は着ていた和服を破いた布に何かの文字を書いて徐さんの懐にねじ込み、拝みながら去っていったという。翌年、優しくった養母が他界すると、養父の虐待が始まる。牛の世話や薪拾いを強いられ、2歳下の養父の娘の登下校に



「一時帰国」を果たし、支援者が開いた激励会に参加する徐士蘭さん(中央)。羽田澄子監督(左)からも「本当によかったね」と帰国を祝う言葉をかけられた千代田区で12日

中国残留孤児
1945年8月9日の旧ソ連の満州(現中国東北部) 侵攻による混乱などで肉親と生き別れ、戦後も中国に取り残された日本人の子ども。満州には国策で多くの日本人が移民していた。孤児は日本人であることを知らなかったり、帰国の機会や手段を与えられず、中高年になるまで帰国できなかった。厚労省は中国政府と協力し、本人や証言者の面接や現地調査などを踏まえ、孤児を認定している。だが戦後60年以上が過ぎ、養父母らが高齢化したり、年金などがあったりして、調査や認定が難しくなっている。

に残留孤児の認定を申請したが、事情を知る人が他界していたり、証拠品もなく、認定されなかった。手がかりの布きれも文化大革命中、養父が当局の弾圧を恐れ焼いたという。血液型はA型で、右腕に天然痘の予防接種の痕が残っている。現在、三女の家族と安定した生活を送り、永住帰国も望んでいない。子どもからは「ゆっくら」と晩年を過ごしたかどうかとなだめられるが、徐さんは「私の気持ちが分かっていないと憤る。」「いまだになすすべもなく、自分は何者なのかを証明したいばかりに焦り続けている。さまざまな苦勞をしてきたが、どうってことはない。何よりつらいのは、厚労省に、いまだに孤児と認めてもらえないことだ」
12日、都内であった激励会には支援者や羽田監督らが集まった。徐さんは「祖国の土を踏み、気持ちすがすがしく楽になり、落ち着いている。帰国に尽くしてくれた多くの人に感謝したい」と語った。